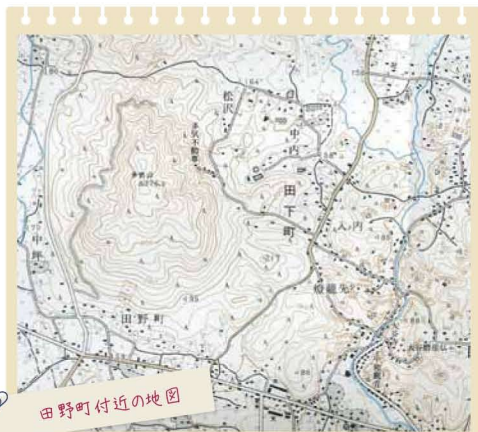


本多正純の宇都宮城改修における大谷石採掘 「はたして田野村か荒針村か」

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

本多正純は、宇都宮の町割りを行うとともに宇都宮城の大改修も行った。それまでの宇都宮城は、土塁と堀、それに館を中心とした中世的な面影を残した城であった。それを一部石垣を築き、土塁の上には櫓を構え、堀も二重三重に巡らした近世の城へと改修したのである。石垣の石は、大谷石を用いた。大谷石の本格的な採掘・利用は、この時に始まったといわれる。

この宇都宮城改修に用いた大谷石の採掘地について、『宇都宮市史第六巻近世通史編』には、「元和六年（一六二〇）自領田野村に命じて、大谷石を採掘させ、石垣などの修理に用いた」とある。田野村とは現在の田野町で、多気山の南側、国道293号沿いに位置する。ところでこの田野村説に対し、田野町の一人から「この説はおかしい」との異論が出た。異論の主は、大谷石研究会



田野町付近の地図



おれ日の二の丸城址

理事長の小野口順久氏である。小野口家は江戸時代田野村の名主をつとめた旧家で、順久氏自身、生まれも育ちも田野町で田野を良く知る人である。その小野口順久氏が、「田野には大谷石を採掘した跡はない。田野村説はおかしい」というのである。

田野村説の根拠となったのは、下野庵宮住が著した『宇都宮史』のようだ。そこには「大谷石ノ始、元和六庚申年、御領分田野村へ被仰付、御城御普請ニ付、始て石切出候、當時は三枝内匠様御知行所にて候得共、其節八字都宮領ニ御座候只今二庄屋方ニ御石垣御用相達候ニ付、宮領之節諸役御免之証文所持いたし候」とある。しかし、田野村は、旗本三枝氏の領地となったことはない。三枝領となったのは荒針村であり、その荒針村も元和六年当時は宇都宮藩領であった。荒針村の一部は、現在の大谷町であり、大谷町はいわずと知れ

た大谷石の本場である。元和六年、本多正純が大谷石採掘を命じたのは、当時宇都宮藩領であった荒針村ではなかったか。下野庵宮住は、田野村と荒針村とを取り違えたものと思われる。

そんな推論を証するように『宇都宮市史第五巻近世史料編Ⅱ』に「新里村と岩原村の石切争論」の文書が見え、そこに「先年本多下野守様御代迄近村荒針村ニ而御城御用石相勤申候、以後奥平美作守様御代ニ罷成、被荒針村御他領故御用石御手支被遊候付」とある。これによると荒針村で城の石を採掘していたが、奥平美作守代（一六八五〜九七）に荒針村は他領三枝領になったので藩の役人によって岩原・新里両村で御城御用石を差し出すようになったとある。宇都宮城で使用した大谷石の採掘は、当時宇都宮藩領であった荒針村で行われたことがわかる。

小野口氏以前に異論を唱えるものがなく、田野村説が長らく信じられてきたのは、著者の権威ではなかったろうか。著者の下野庵宮住は本名を上野久左衛門基房といい、鉄砲町の町名主。薬商を営み、質屋、金融も行い、上町町衆のリーダー格の文化人で、郷土史家、狂歌師としても名を馳せた人である。そのような人が著した本に間違いはないと後世の人は信じ切っていたのである。

「疑うことは科学の始め」といわれるが、それにしても堂々と異論を唱えた小野口さん立派。